處が多くの人の話を聞いて居ると、此秩序的組織的と云ふ點が缺けて居ります。即ち話の筋が前後したり重複したりして、前に言ふべきことを前に言はずして後に言ひ、後に言ふべきことを後に言はずして前に言ひ、或は前に言ふべきことを全部言はずして後に言ふべきことを言ひ、それがまた終らぬうちに前に言ふべきことで言ひ、殘したことを言ひ、それを言ひ終つて始めて後に言ふべきことの後半を附着けたり、或は又同じ事を二度も三度も言つたり、甚だしいのになると、一寸した談話に同じ事が五六回も十回以上も繰返されることがありますが、斯う云ふ談話は極めて拙劣な談話で効力の薄弱なものであります。

物にはすべての順序と云ふものがあります。談話も談話の主題即ち目的用件について相手方の理解を得んが爲めにするのでありますが故に、順序と云ふことが必要であ

ります。相手方を順序的に理解せしむるのが談話として最も有効なる談話であり、最も經濟的文明的談話であります。秩序なく組織なく只だ無茶苦茶に話したのでは相手方が順序的に理解することが困難であります。相手が順序的に理解することが困難であれば相手は不徹底な所について質問しなければならないことになりますから、話すものは二度も三度も同じ事について同じ話を繰返さなければなりません。非秩序的非組織談話が第一時間の不經濟なる理由は此處に在ります。

組織的でない話は話の筋が前後したり重複したりするために、相手方は部分々々について分つても、全體としての筋が分らなくなることがあります。或は全體の意味は了解することが出來ても、部分について分らないことがあります。又部分と全體との關係交渉が明確に判定され得ないことがあります。然う云ふ場合に相手方に再三再

四聞き直せば、再三再四同じことを繰返して話さなければならないことになります。相手方が聞直さないにしても重複したり前後したりするために言ふべきことを言ひ落したり、言ふ必要のないことを言つたりすることにあります。そこで一度重複する時間が假りに五分間であるとし、二度重複すれば十分間、三度重複すれば十五分間を徒費することになり、筋が前後して相手が分らない爲めに一度聞返す時間が五分間とすれば、一回で五分間二回で十分間三度聞直せば十五分間の浪費となります。重複三回聞直し三度あれば都合三十分間を徒費する勘定であります。一日に一回以上談話しないものと定つて居たら三十分間の不經濟で濟みますが、如何に談話することの少いものでも日に一回や二回ではない、少くとも數十回數百回の談話をする、家に居ても外に出ても談話しない時間と云ふものは極めて少ない、一日二十四時間中睡眠する時

間を除いた大部分は多く談話に費される。假りに一日平均百回談話するものとし、重複其他非組織的なる爲めに生ずる徒費時間が一回に一分間づゝあるとすれば、合計百分即ち一時間四十分を徒費することになります。一日に一時間四十分の徒費とすれば一ケ年間には六百八時間と二十分、十年間には六千八十三時間と二十分、五十年間には三萬四百十六時間と四十分を徒費することになります。

（二）此時間を活用すると否との得失の差

そこで此日に徒費する一時間と四十分を活用すると否との得失の差は何うであるかと云ふと、此時間の活用力を假りに金に換算して一圓とすれば、活用すると否とは一圓失はずして一圓を得ると一圓を得ずして一圓を失ふとの差でありまして、正に日々二圓を得ると二圓を失ふとの差となります。失はざるを益とすれば活用に於ては四圓

の得となり徒費すれば、四圓の損となるのであります。

又此時間を活用して得た一圓を貯蓄して行けば、一年間には三百六十五圓、十年間には三千六百五十圓、五十年間には一萬八千二百五十圓となります。但し是れは元金丈けでありまして複利法によつて計算すれば五十年間には數十萬圓の巨額となります。之れに反して、毎日一時間と四十分を費徒するのが毎日一圓づゝの負債となるとすれば、一年間には三百六十五圓の負債となり、十年間には三千六百五十圓、五十年間には一萬八千二百五十圓の負債となり、之れに複利を加ふれば即ち數十萬圓の大負債を生ずることとなります。故に假りに複利計算によつて五十年間の損失額が三十萬圓であるとすれば、三十萬圓の財産家は五十年後には一文無しの貧乏人となり、五十萬圓の資産家は二十萬圓の財産家に低落し、二十萬圓の財産家は全財産を盡して猶十萬

圓の借金となる譯であります。

是は當人一人の損得の數字的計算でありますが、相手の一人乃至數人も其人の爲めに時間を費し生産力を犧牲にして居るのであますから、其れを合計すれば實に驚くべき巨額となります。其中には一時間が百圓千圓に相當するものもありませうし、五圓十圓に相當するものもありませうし、或は十錢乃至一圓範圍に相當するものもありませう。隨つて明確に計算することは困難であるが、假りに、其人の爲めに時間を徒費せしめられた一時間と四十分の損失が平均十圓とすれば、一ケ年間には三千六百五十圓の損失であり、十年間には三萬六千五百圓、五十年間には十八萬二千五百圓の損失であります、之れに利子を加算すれば少くとも二百萬圓以上の巨額となり。されば全部合計して見ると僅か一人が非秩序的非組織的談話をする爲めに其人及び其累を受け

たものゝ損失額は五十年間に二百三十萬圓以上の額となります。之れを組織的談話によつて短縮した時間を活用して得る利益が同額の利益であるとして對照したならば、無秩序的非組織談話が如何に大なる損失となるものであり如何に大なる不利益となるものであるかが明白に理解せらるゝであらうと思ひます。

又非組織的談話の爲めに徒費する一時間なり二時間なりの時間を、外國語の研究時間に利用し、其時間に十語づゝ毎日覺えて行くとすれば一ケ年間には三千六百五十語を覺え、十年間には三萬六千五百語を覺え、二十年間には七萬三千語を覺え、立派な外國語學者となることが出來るのであります。

其他如何なる零細な時間でも利用する途はいくらもあります。而して精神的に得た物質的に利益することが澤山あります。自分の日常の談話が非組織的であるために無

用の時間を費して居ることに無頓着である人は、其徒費して居る時間に收得し得る精神的に得た物質的利害を失ひつゝあるのみでなくて、其れが爲めに他の時間内に於ける利益の幾分をも喪失しつゝあるのであります。

假りに諸君が人と談話するときの事を考へて見れば、談話がなぜ組織的でならないかは明白に了解せられます。相手の人の話が筋が前後したり重複したりしたら諸君は果して解りのよい談話として聞くか何うか、恐らく諸君は解り難いことを思はざるを得ますまい。話が混淆かつて再三再四問返して聞直さなければ徹底した領綱を得ることが出來ないでせう。然う云ふ場合に諸君は果して不快を感ずることはないか、それが爲めに時間を徒費させられたら諸君は迷惑を感せずに居られるか何うか。恐らく諸君と雖も解り難い話をされ再三再四問返し聞直し、それが爲めに多くの時間を徒費せ

しめられて快感となることはありますまい。話上手だ、好きな人だ、愉快な人だ、話して居て引入れられる人だと稱して歡迎することはないでせう。

諸君が、筋の混亂した話をされ了解に苦しましめられて愉快と思はないと同樣、又再三再四問返し聞直さなければならぬ樣に手數のかゝる厄介な話を聞かされて面白いと思はないと同樣、又多くの時間を徒らに費さしめられて快感を覺えないと同樣、即ち不快感を催すことすはあつても快感は些しも起し得ないと同樣、世の中のすべての人々も矢張り愉快と思はず面白いと感せず快感的何等の感じも起らないものであります。否、然う云ふ場合は何人と雖も不快迷惑嫌忌の念を起さざるを得ないのであります。

苟も世の中に處して共存共立的生活をするにせよ、將た生存競爭の生活をするにせよ、多くの人に好かれないのは非常の不利益であります。況んや多くの人に不快感を與へ迷惑を及ぼし嫌忌の念を起さしむるをやで、其不利益損失は遂に社會的死となる場合が多いのであります。

一三　相手の自尊心を傷けないこと

(一)　人は誰でも自尊心がある

人は誰でも自分を尊しとし豪しとする自尊心と云ふものがあります。俺は世界で一番尊いとか豪いとか云ふ程の考へがなくても、少くとも世界の有象無象とは多少異つて居る位の考へは誰しも持つて居るのであります。其中にも非常に自尊心の強いものと、然うでもないものと區別があり、強いうちにも段々あり、然うでもないものにも

いろ〳〵ありまして、萬人一様と云ふ譯には行きませんが、兎に角人には誰でも自尊心と云ふものゝあることは事實であります。

貴君よりも何某さんの方が豪いと云はれると、それが事實であるにしても言はれたものは面白くない、不愉快であるな、アに實際に實力を比較すれば俺の方が豪いに決つて居る然るに彼奴よりも俺の方が豪くないなどと怪しからんことを言ふ奴だ。縱令事實俺の方が豪くないにしても俺の前で俺の方が豪くないなど云ふべき事でない、實に失禮千萬な言葉だと思ふ。面前で言はなくて蔭で言はれても其事が耳に這入れば餘り好い氣持はしない。褒められるのは直接でも間接でも惡い氣持はしない。お世辭だとは知つても腹の立つことはないものであります。是れは萬人共通の人情であります。此自尊心を傷けないと云ふことは社交上大いに注意しなければならないことでありまして、之れを心得て居ないと大失敗を招くことになります。

(二)　相手の知らぬ事を質問するな

其處で此の自尊心を傷つけない心得の第一としては、如何なる談話の際に於ても相手方の知らないことを質問してはいけないと云ふことであります。

何んな人でも得意な事と不得意な事とがあります、知つて居る事と知らぬ事とがあります。知つて居る事でも詳しく知つて居ることは皮相的に知つて居ることがあります。故に人に好かれる談話術としては、相手の知らない事を質問するのは相手を困らせる事になりますから、相手は不快な感じのするので、結局嫌はれることになります。同じ學者と云つても夫れ〳〵專門があつて學者だからと云つて總ての事に精通して居るものとは言へません。文學の事に關しては精通して居ても理學、法學、醫學と

云ふ方面の知識に詳しい知識を有つて居なかつたり、醫學者としては第一流の人でも法學や文學の事には門外漢であつたり、法律の事なら何でも來いと云ふ人でも文學や物理化學の方面の事には御存じのない事が多かつたり、實業界の事には精しくても政治界の事には殆ど無知識であつたり、政治上については活字引のやうに詳しくても商買上の事にかけては昔の武士と同樣カラ駄目であつたり、花柳界の事は人後に落ちないと云ふ人でも宗教界教育界の事には何にも知らなかつたり、何でも精通して居て誰に何麽事を質問されても返答に迷子つくなどの事は決してないと云ふ程の人は先づないと云つてもよいのであります。人の腦力には限りがあつて一人の頭腦で百科全書的に世の中の一切の事に遺憾なく精通することは困難と云はんよりは寧ろ絶對に不可能であります。

そこで談話の秘訣としては相手が實業家であつたら實業上の事以外には質問しない。相手が醫學者で醫學上の事以外の事は質問しない相手が宗教家であつたら宗教以外の事については質問しないと云ふ方針を採ることが必要であります。殊に皮肉な事を言つて相手の鼻柱をへし折るのは禁物としなければなりません。

例へば相手が政治界の腐敗とか墮落とか云ふことについて憤慨的話をして居るときに『世の中には隨分嫉妬半分に我々商人に暴利を貪るの商業道德がないのと種んな事を言ひますが、其麽奴は年中ピイ〳〵で懷中の空つけつな意氣地無しです、思つて見ると可哀さうと云ふより寧ろ憫殺すべき奴等ですね。』などと皮肉なことを云へば、縱ひそれが皮肉の積りで言つたのでもないにしても、相手方は當てつけた皮肉だなと思つて快くない。相手の方は一度然う云ふ皮肉な事を言はれて感情を害すると必ず『彼奴

は生意氣な奴だ』とか『イヤに皮肉なことを云ふ奴だ』とか『乙な事を吐しやがつて、いけ好かない奴だ』とか『癪に觸る奴だ』とか思ふ。然う云ふことを一度でも思はせると二度目からは決して好意好情を以て迎えられなくなる。度々皮肉なことを言へば玄關拂ひを喰はされたり、相談のお斷りを喰つたり、兎角萬事不利益となることが多いのであります。

又相手が大いに博識を衒つて得意になつて話して居るときに、其人の卽答の出來ない問題を捉えて根掘り葉掘り追窮するなどは、其人の鼻先をへシ折るものでありますから、其人は甚だしく感情を害し、何時までも其れが禍するのであります。彼奴は厭な奴だなとか俺の弱點を狙つていやに皮肉な質問をする奴だとか思はれたら、それを消滅させることは一朝一夕では出來るものでない。丁度一度詐欺を働くと

其れが何處までも禍して危險人物扱ひにされ、一度惡辣なことをすると惡辣人物視され、一度不眞面目なことがあると何時までも不眞面目扱ひされるのと同じであります。

(三)　百發百中必ず人に好かれる極意

必ず如何なる人にも好かれる談話術の極意の一つとしては、相手に花を持たせることであります。相手が感情を惡くするやうな皮肉を言つたり、相手が返答に困るやうな質問を發したりするのは、相手に花を持たせるのでなく、寧ろ反つて折角自ら持たんとする花を叩き散し、得意の鼻をへシ折るのでありますが故に、其んな事を言つて人に好かるべき道理はないのであります。自分が花を持たせられて氣持の良いと同樣、多くの人も花を持たさるれば嬉しいに違ひない氣持のよいに定つて居ります。隨

つて氣持の良いことを言ふ人快い愉快な談話をする人を好むは人情の自然であり人間の弱點でありますが故に、其弱點に乘じ自然に從ひ相手の氣焔でも法螺でも得意とする所を尊重し謹聽し、縱し其れが間違つて居やうと駄法螺であらうと構はず、大いに敬服した顏をするに限ります。然うすれば相手の人は感情を害する事の無いのみでなく衷心大なる愉快を感じ、大いに好意好情を有つて呉れます。隨つて次の談話の際は終始好感を以て接し、多少俺は豪いだらうと云ふ鼻慢的態度は免かれませんが、相談事なら大抵の無理は聽いて呉れるものであります。

商人にしても多くの人に好かれなければ商賣は繁昌しない。官公吏會社員にしても上役同僚に好かれなければ出世はしません。官公吏會社員にして上役に憎まれたり、同僚に排斥されるやうな人物で出世した例はない。上役のみに好かれても同僚に憎ま

れては一時出世しても永續しない、同僚に好かれても上役に憎まれては一時的にも何にも絶對に出世することは出來ません。立派な才能を持ち知識を有つて居ながら不遇不成功の地位にあつたり、一生を轗軻不遇の裡に送る人物が世に尠くありませんが、然う云ふ人は多く自己を主張して他を認めることを知らない人に多い。卽ち人情の自然を巧に利用し、人情の弱點に乘じて巧みに自己を主張する方法を知らないものが多いのであります。語を換えて言へば人に好かれる談話術の心得がなく、人に好かれる談話術の一要件である所の『相手に花を持たせる』と云ふことを知らず、頑固に自己を主張したり、相手の得意長所とする處を貶したり、皮肉な事を言つて相手の鼻柱を挫いたり、相手が返送に困るやうな事を質問したり、相手の言動を嘲笑するやうな態度を示したりすることに原因して居るものが多いのであります。

總て如何なる場合でも、相手に花を持たすれば、相手の人が感情を害しないのみでなく、氣持がよい。氣持よく談話する人に對しては何んな者でも惡感情を以て接するものはない。好意好情を以て迎ふることはあつても惡意不快感を以て迎へることのないのは事實であります。即ち人に好かれ歡迎されるのであります。多くの人に好かれ歡迎される人物で出世をしない筈はありません。商人であつても多くの人に好かれ歡迎されれば必ず其商品の販路は益々擴張される、商店は益々繁昌する、何かの事で失敗しても援助者が現はれる、此方から平身低頭して御願ひ申さなくても、先から『何うだ力を貸して遣るが何とかモ一ト奮發して見ないか』とか『私の力で出來る丈けの事なら相談に乘つて上げるから、必要な時は遠慮なしに然う言つてお來なさい』とか親切に言つて呉れる。官公吏會社員にしても上役同僚に對して花を持たすれば上役

にも好かれ同僚の氣受けもよい。不幸にして長く低い位地にあれば同僚から上役に推薦盡力して呉れることはあつても、上役に目を掛けられて位地が高くなつたかと云つて反感を買つたり排斥運動を起されたりすることは絶對にない。人に好かれると云ふことは卽ち人の同情を得ると云ふことであります。何んな豪い人物でも人の同情なくしては何事も出來るものでありません。大工場の主人でも雇傭人の同情がなければ工場の仕事は滿足に出來ない、或程度までは出來ても、それは職工が賃銀に對して役目的にする丈けの事で、職工が眞に工場主に對する好意好感からではない。資本家は勞働者及社會の同情を得なければ何事も出來ないが、勞働者も資本家其他多くの人々の同情を得なければ權利利益は擁護も增進もされない。官公廳會社などの重役とか課長とか云ふ地位の人でも同僚下僚の同情を失しては永く其地位に居ることは出來

ない、自分から退くか排斥されるか何れかによつて處決しなければならない破目に至ります。斯う云ふ事實は現在世間に幾らもあります。

地位の高いものが地位の低い下僚を呼ぶにも『お前達が』と云ふ言葉を使ふよりも『諸君が』と呼んだ方が下僚の方は氣持がよい。何んな無學文盲な勞働者でも人間である以上夫れ相當な自尊心と云ふものがあり己惚れと云ふものがある。『お前達が』などと呼ばれると上役だからと云ふ氣はあつても『何だ上役だからと云つて馬鹿に威張つて居やがる、此處に使はれて居ればこそヘイコラ言ふものゝ、此處を出りや同じ人間だ』と云ふ氣が簇々と起る。『諸君が』と言はれると尊敬されるやうな氣持がして何となく愉快に感ずる、其結果は『あの人は如才がない、我々勞働者に對しても他所の社長などのやうに呼び捨てにしない。好い人だ、豪い人だ』と大いに同情を得

る、好感厚情を以て歡迎される。其相違は雲泥の相違で、これから生ずる利益と損失は實に莫大なる相違であります。

軍人でも下士卒に好かれない上官は評判が良くない、服心されない、隨つて命令が徹底しない、イザ戰爭と云ふ場合になつても下士卒が思ふやうに動いて呉れない。又上官に好かれない、下級官は昇進が遲い、上官の氣受けがよくない爲めに中將大將までなり得る器量を持つて居ながら中佐大佐級で豫後備役に編入されたり、佐官級までなり得る才能を有つて居ながら中大尉で休職になつたり豫備役に葬られたりするものが尠くない。然う云ふ事は自力の如何にも原因はありますが、多くは上官なり下級なりに同情があるか何うか、即ち好かれるか嫌はれるかにあります。而して其度は好嫌の度に正比例するものであります。

人に花を持たせる、相手に花を持たせて喜ばせると云ふことの必要なのは、必ずしも軍人、官公吏、會社員、商人ばかりではありません。如何なる境遇に在つて如何なる職業に從事して居る人でも苟くも社會生活をして居る以上何人でも同樣であります。

(四) 人に持たせる花は結局自分の花

人に花を持たせることは卑屈のやうに思はれますが、人に花を持たせると云ふことゝ卑屈とは似て非なるもので、精神に於て非常の差違があるものであります。卑屈は精神的に自分を卑くして人に屈服するものでありますが、人に花を持たせるのは、精神的に自分を卑く屈するのでなくて、心では自分を尊重するが、社交上の手段として、人を尊重し人の長所とし得意とする所を尊重してやるのであります。つまり

自分を尊重せんが爲めに人を尊重するのであつて、自分を卑くせんが爲めに人を尊重するのではありません。卽ち惚れられんが爲めに惚れるのと同理で、尊重されんが爲めの尊重であります。屈せんが爲めに屈するのでなくて大いに伸びんが爲めに屈するのであります。人情は共通的のものでありますが故に、自分を尊重して呉れない人を尊重することは誰でも厭であります。自分を尊重して呉れ花を持たせて呉れる人に對しては同樣に尊重し花を持たせる氣になれるが、自分を尊重して呉れず花を持たせて呉れない人に對して此方からのみ尊重し花を持たせる氣になれないのは學者でも金持でも貧乏人でも同じことで、人情に變りはないものであります。隨つて人を尊重せず人に花を持せずして自分のみ尊重されたい自分のみ花を持ちたいと云ふのは無理な註文であり、到底出來ない相談であります。卽ち人に好かれないこと

をして人に好かれたいと思ふのであります。

そこで人に花を持たせることを煎じ詰めて見ると、結局自分に花が咲くことゝなるのであります。昔嘶の花咲かせ爺は枯木に花を咲かせたが爲めに殿様より種々の寶物を賜つて自分の花を咲かせることになつたが、其原因は飼犬を愛したと云ふ動物に對する同情尊重が原因となつて居ります。卽ち飼犬に對して同情と云ふ花を持たせたが爲めに、其犬が隣家の惡い爺に殺された後犬の靈の作用によつて自分に花が咲いたのであります。此點に於て花咲せ爺の嘶は子供にのみ聞かせる話でなくて大人も大いに味ふべきものであります。

談話の際に相手の返答に困るやうなことを言はないのは詰る處相手に花を持たせるのでありますが、其相手に持たせた花は經局自分に持たせられる花であることを知

らなければなりません。卽ち相手に花を持たせるのは結局自分の花を咲かせんが爲めであり、其結果は必ず花となつて酬ひられるものであることを知らなければなりません。お互様と云ふことは吾人の日常にする所でありますが、此お互様と云ふ心持を忘れなければ、相手に花を持たせることが出來ます。自分が人に好かれたい善く言はれたいと同様、人も亦好かれたい善く言はたいものでありますが故に、自分が人に好かれ善く言はれたいと思つたら先づ人を尊重し人に花を持たせるにあります。卽ち先づ自から人から好かれ善く言はれるやうにするにあります。

例へば紡績會社の取締役とか社長とか云ふ人物と談話する時は、紡績業に就て質問すれば、相手の人は自分の專門とする所であるから說明に迷兒突くやうなことがない、自分の知つて居る限り說明する、詳しく話すか簡單に話すかは其人によります

が、其點は相手方の自由にお委せして縱ひ間違つて居る處があつても淺薄であつても、其麽事は曖にも出さず、其說明を尊重し大いに感服した態度で謹聽する。然うすれば相手の人は俺の說明を心から感服して聽いて居るのだと思つて大いに得意になり、自尊心已惚れ根性を滿足させる。隨つて談話を快感の裡に終始せしむることが出來ます。然るに、實業家であるからと云つて其人に餘り知識のない製鋼事業や製藥事業などの事について質問すれば、其人は實業家而も何々紡績會社の取締役か社長と云ふ肩書に對しても、其麽ことは全然知りませんと云ふ譯にも行かない、何とか仔細らしく質問に答へなければならぬ、答が全然出來ないとすれば兜を脱いで降參しなければならぬ、兜を脱いで知りませんと云へば如何にも意氣地のないやうな氣がする。知らない事でも知つて居るやうな顏をするのが人情の弱點で殊に近頃の人々の傾向であ

ります。故に然う云ふ質問は知らない事を說明せよと云ふやうなもので元來無理な註文であります。隨つて相手の人は縱し何とか好加減の說明をするにしても心の裡では好加減惱まされる。卽ち不快な心で說明する。說明が出來なくて其麽ことは知りませんと云ふにしても決して快感を覺えるものでない、人によつては俺が知らないことを知つて居ながら皮肉な質問をすると思ひ、俺が其方の專問家でないことは乃公が紡績會社の重役であることで分つて居る筈だ、それに全然別方面の事について質問するなんて隨分間拔けな奴だとか、或は一口に何と云ふ馬鹿な奴だらうとか思ふ。然う云ふことを思ふ時は決して愉快な心ではない。一度こんな事を思はせると二度目からは間拔た質問をする男、馬鹿な奴、人に質問することを知らない奴と云ふ記臆が禍と爲して快感を以て迎へられなくなるのであります。

或は又、教育家に對して政治界の裡面を訊いたり、小學教師に大學教育の事を尋ねたり、中等教育上の事について細かい事を聞いたり、理論的教育家に對して實際教育の事を質問したりするのも、矢張り相手の返答に迷兒つく質問を發するものであり、政治家に對して文學の事を訊いたり、政治家でも能く政治の何たるかを學理的に知らない陣笠政治家に政治の學理的說明を要求したり、政治運用上について難かしい質問を發したりするのは、結局する處相手を迷兒突かせ恥をかゝせるものでありますが故に、然う云ふ場合相手の人は決して愉快な感じのするものではありません。已惚心の強いもの程困つた質問をする奴だと思ひ不快に感ずるものであります。相手を返答に迷兒つかせて恥を搔かせ不快な思ひをさせるのは相手に花を持たせるのでなくて、相手の花を叩き散らすのであります。隨つてそんな質問をする人が人に好かれやう消理

はないのであります。

要するに相手の人に花を持たせると云ふことを忘れなければ、相手を返答に迷子つかせるやうなことは出來ないのでありますから、此人は何が專門であり得意であるかを考へて話し、其人が專門として最も得意とする所について而して其人が容易に說明の出來ることを質問すれば其人のお氣に入ることは百發百中であります。

一四　謙讓謙遜は處世上の萬能膏

（一）自慢する人の心は芝居の描割の如し

人と話をする時矢鱈に自分の自慢をする人がありますが、此自慢程聞き苦しいものはなく是れ程相手の心に不快を感ぜしむるものはありません。其の不快感は自慢程度

に正比例するものでありまして、いよいよ大いに自慢さるればいよいよ大いに不快感を誘發せらるゝものであります。

己れの長所とか美點とか云ふもは自分から吹聽廣告しなくても、自然に人が認めて呉れるものであります。乃公は豪いぞと自分の口から云はなくても、事實豪かつたら實力によつて社會が認めて呉れます。乃公は斯う云ふことが長所である乃公の得意は斯う云ふ所にあると自慢しなくても、人は夫れ相當の評價を以て認めて呉れるものであります。自家の商品をより多く賣りより販路を擴張せんが爲めにはより多く廣告する必要がありますが、實質の詰らないものは幾ら廣告をしても人は認めて呉れません。商品の聲價は製造人や販賣者が定めるのではなくて需用者たる一般世人が定めて呉れるものでありまして、供給者たる製造者や販賣者が幾ら自慢をしても、事實其れ丈け

の價値のない物であつたら需用者たる世人は一個の手前味噌として冷笑を以て迎ふるに過ぎません人間も矢張り商品と同樣で眞實其れ丈けの價値のある人物であつたら自ら自慢せずとも世人は自然的に認めて呉れます。幾ら自慢しても其れ丈けの價値のない人物であつたら世人は鼻摘みにして幾分の價値までも零にして仕舞ひます。

芝居の描割りは一見奥行きがありさうに見えるが實際は奥行も何もないもので平面の布なり紙なり板なりに描いたものであります。自慢する人の心も丁度是れと同じで奥行がありさうで自慢する丈けの奥行のあるものではありません。能ある鷹は爪を隱すと云ふ諺の如く能ある人は決して自慢をせぬもので、人から稱揚されても謙遜して得意然たる態度はしません。即ち奥行のあるもの程自慢しないものであります。而して奥行のないもの程自慢するものであります。

自慢する者に奥行のない事實は世上に掃く程轉がつて居りますが、私は最近其生き
た實例として諸君に披露するに適當なる經驗をしました。其れは或る大きな會社の社
員で今度の戰爭前から在外支店に勤めて今度久し振りで歸朝したと云ふ人についての
事であります。社名並に其の人の氏名は其の人の名譽の爲め茲には明記しませんが、其
人の事については豫て其の人を子供の時から育てたと云ふ叔母なる人から自慢話を聞
かされて居りしたので、何麼人物か知らと思つて居ました。處が今度其叔母の家で偶
然に會ひましたが、私は其人を一見した時早くも高慢痴氣な人だと思ひました。其うち
に種々の話をして見ると私が思つた以上に高慢痴氣な男で、其會社は乃公が一人で切
り廻して居ると云つた風の口吻を漏し、當代の大實業家などは小僧扱ひに呼棄てゝ、彼
奴は馬鹿だとか詰らん奴だとか、世間では偉い人物のやうに云つて居るが此間會つて

見たら詰らん奴だつたとか云つて天下に自分程偉いものはないやうなことを言ふ、又
當代知名の學者などに對しても同樣で、其の氣障さ加減と云つたら嘔吐が出さうであ
ります。而も當人はどれ丈けの偉い處があるかと云へば、或外國語學校を卒業して其會
社に現在では在外支店の一部の主任をして居ると云ふに過ぎないのであります。而し
て僅か五六年外國――外國と云つても日本とは目と鼻の間に在る所で外國と云ふもホ
ンの名ばかりで外國呼ばりをするのは笑はせやがると云ひたくなる所であります――
に居たと云ふのを唯一の自慢とし、話の一事〳〵に外國では〳〵がついて廻り、日本が
何うだとか斯うだとか日本の惡口を言つて得意で居る。其生意氣で氣障なことは正に
漫畫子の好材料もので到底鼻持ちのなつたものではありません。私は『其れ程日本人
が下らないものばかりで、其れ程日本の惡口を言ふなら、寧その事日本の國籍を脱し

て生涯日本に來ないが宜いでせう』と言つて高慢痴氣な鼻柱を叩き折り、象皮のやうな面の皮をヒン剝いでやらうかと思ひましたが、こんな人格の下劣な大馬鹿野郎を相手にして其麼皮肉を云ふのは大人氣ないと思ひ直し好加減にあしらつて別れました。

其人は恐らく自分の偉さ加減を認めさせやうと云ふつもりで當代知名の學者や實業家をコキ卸して氏名を呼棄にしたり、支店に於ける自分の勢力や成金的豪遊振りを吹聽したのであらうと思はれますが、私は些とも其人の偉き加減を認めることが出來なかつたのみでなく、却つて此大馬鹿野郎がと思はざるを得ませんでした。而して奥行のない薄つぺらな漫心熱に冒された輕薄才子の好標本たるを痛感せざるを得ませんでした。而して又其人が自分の豪さ加減を見せやうと自慢話をする程相手の私は其輕薄な馬鹿野郎さ加減を思ふ度が益々甚だしくなり、斯かる生意氣な淺薄な馬鹿野郎の青

二才を在外支店の主任として使用する會社は禍なるかな、會社は此馬鹿野郎の爲めに年々莫大の損失を招いて居るのに氣が附かずに居るだらうと思はざるを得ませんでした。

右は私が最近に經驗した一實例でありますが、諸君の中にも斯くの如き經驗を有し、漫心熱に冒された奴の言行が如何に人に不快感を與へ如何に反感を有せしむるものであるかを泌々と感じて居るものが少くなからうと思ひます。

(二) 慢心熱に冒されぬ豫防法

已惚と黴氣のないものはないと云ふから人間は誰しも多少の己惚と黴氣は有つて居ると認めて差支ありませんが、己惚や黴氣などと云ふものは自分から世間に廣告すべき性質のものでありません。梅毒患者が、吾輩は梅毒患者である何うだ豪いだらうと

世間に吹聽したら噴飯抱腹其馬鹿さ加減を嘲るものはあつても感心して成程豪いと思ふものは天下廣く人多しと雖も恐らく一人もありますまい。

己惚れも梅毒と同じで其れを公然自ら世人に發表すべき性質のものではない。己惚と云ふものは元來己に己が惚れるのであるから、心の裡では十二分の己惚れを有つて居ても表面己惚れなどは微塵もないやうに裝ふのが當り前であります。社會は公平なもので幾ら自慢をしても夫れ丈けの値打のない人物であつたら決して認めて呉れるものでない。或場合には買被ることもありますが、其れは一時的であつて永久的ではない、巧妙なる法螺と自慢とに欺されて無價値の人物を豪い人物かのやうに思ふこともありますが、社會は盲目ばかりではない、馬鹿ばかりでもなければ神經の麻痺した不具者ばかりではない。必ずや公平なる判斷の下に其人物の評價をする時が來ます。

僞善者が化の皮を剝がれるのも僞英雄が袋叩きにされて社會より放逐されるのも、隱れたる善者が見出され、隱れたる英雄が社會の表面に浮び出るのも、悉く社會の公平なる裁判の結果であります。

自慢は所謂社會を欺き僞らんとする一種の淺薄なる詐欺的言行に外ならないものでありますが故に、社會の人々が何時までも淺薄なる詐欺漢に欺かれてお目出度く納つて居ることはありません。直ちに或は早晩其自漫の酒面をヒン剝いで唾棄し冷笑と嘲罵とを浴せかけることは世の中の幾多の事實が立派に證明して居ります。自慢は藝の行止りと云ひますが、自慢が己を禍ひすることは必ずしも藝のみに限りません、人の總てを禍し、其人を殺す身中の虫であります。身から出る錆であります。人と談話をする場合に、自分の事やら自分の身内の事などを矢鱈に自慢する人がありますが、是

れ程聞き苦しい人の感情を惡くさせるものはありません。殊に自分の事を自慢するに至つては到底鼻持のなつたものではありません。而して其淺薄のドン底が見え透いて、何程の奥行ある人物かは直ちに判明するものであります。

如何なる場合に於ても奥行きを人に窺知されるのは非常に不利益であります。少くとも不利益となる場合が多いのであります。此人物は何程の奥行があるか、其深淺の度が全然不明瞭でも困りますが、淺いことが何人にも直ちに判明しては、其れに乘せられる機會が多く、隨つて利用せらるゝことのみ多くして利せらるゝことが尠いのであります。少しお目出度い人物が人に利用せらるゝことのみ多くして利することの少いのは卽ち奥行の淺いことが何人にも直ちに判明し、其弱點に乘せらるゝからであります。自慢は思慮の足りない何れかと云へばお目出度く出來た人物に多いものであり

ますがこれは取りも直さず、私の奥行は是れ丈けでございと廣告するに等しいものであります。『私は是れ丈けの事が出來ます、是れが私の長所であり美點であります、私は是れ丈けの得意と長所と美點とを有することを非常なる誇りと心得て居ります。私程の得意美點長所を有つて居るものは廣い世の中に恐らく他に一人もないと信じて居ります。故に其れ丈け私は思慮が淺薄であり馬鹿であり世間知らずであり間抜であり頓馬でありお目出度く出來て居る人間であります、皆さん宜しく私の此馬鹿なお目出度い所に乘じて利用して下さい、私は私の自慢する所を煽動られると何麽ことでも遣ります、人に笑はれることでもやります、嘲られ罵られることでも平氣で遣ります、其他どんな藝當でもお望み次第に演じて御覽に入れます』と云ふのと同じやうなものであります。卽ち自慢は自分の奥行を人に知らせる有力なる廣告であり計量器であり

ます。而して復一面人に嫌忌され指彈される材料であり原因であります。何れにしても自慢が社交上有害無益のもので、今度の戰爭に於ける獨逸の無制限潛航艇戰的のものであります。

そこで此慢心熱に冒されないやうにするには何う云ふ豫防法を以てしたらよいかと申しますと、其れは心に常に謙讓と云ふ萬能膏を貼つて置くに限ります。天然痘に冒されない豫防法としては種痘と云ふ豫防法を講じて置くが最善唯一の安全策であるが如く、又胃腸病に罹らないやうにするには日常の飲食物に衞生的注意をするのが最良の方法であるが如く、慢心熱に冒されない豫防法としては謙讓と云ふ萬能の靈藥を忘れないやうに貼つて置くに限るのであります。

(三) 効顯神の如き謙讓謙遜の萬能力

『無二膏や萬能膏より親孝行』と云ふことがありますが、成程誰に問かせても親孝行は善い事に違ひない、又其効力も無二膏や萬能膏に優つて、何に貼けても能く効くに相違ありませんが、生存競爭の比較的緩漫な昔は親孝行でさへあれば生存競爭の劣敗者となり落伍者となることはなかつたかも知れませんが、文明とは云ひながら生存競爭の激烈なるせち辛い今日の活社會に處して、社會的にも個人的にも優勝的な地位を得るには單に親孝行のみでは到底否殆ど絶對に不可能であります。勿論今日の世の中に親孝行は不必要と云ふことはない、必要は何處までも必要であり、未來永久變ることはないのでありますが、社交的方面から云へば謙讓謙遜の德と云ふことが親孝行が倫理道德上絶對必要であるが如く絶對に必要であります。即ち社交上に於てより多くの人に好かれ、より多くの味方を得、より多くの利益を得、より以上の優越なる

最後の勝利を得るは、如何なる場合に於ても謙讓謙遜と云ふ萬能膏を心に貼つて置くことが必要であり、是れさへ貼つて置けば、慢心熱に冒されて嫌忌指彈を受けることが絶對にないのであります。

其處で此謙讓謙遜が何程の萬能力を有して居るかと云ふに、爲すことすることの一切に偉大なる功顯あるもので、而も其効顯の偉大顯著なること實に神の如しであります。こんなことを言ふと何だか賣藥の効能書のやうでありますが、賣藥の効能書にある効顯神の如しは九分九厘の懸値があるかも知れませんが、謙讓謙遜の効顯の偉大顯著なること神の如しと云ふ形容は誇大的形容でなくて一分一厘の掛値なく事實其儘聊かの掛値もない形容であり說明であります。

隨つて談話術としても必ず總ての場合に於て謙讓謙遜たることを要するのであります。如何なる人と如何なる場合に如何なる談話をするにしても、談話中必ず此効力の偉大顯著なる萬能膏を心に貼つて置くことが必要であります。『貴下は應用經濟に長じて居られるさうで……』などと言はれた場合、此萬能膏を貼つて居れば『否、長じて居るなどと謂はれると恐縮の外ございません、只聊、其方面を研究して居ると云ふに過ぎないので、元來器が惡いものですから……』といふ返事をすれば、相手をして奥床しさを感ぜしめますが、若し『ハイ其方にかけては憚りながら私の最も長所とする所で、天下何人と雖も敢て恐れません』などと言つたら相手の人をして『何だ人がお世辭に云へば眞實にして淺薄な馬鹿野郎だな、こんなオツチヨコチヨイに何が出來るものか、チヤンチヤラ可笑しいわイ』と思はしめ、心の奥行を窺知されてしまひます。『何うです、御近況は？！』と言つて置いて相手の返事も待たず、問はれもしない自

分の事をベラ〳〵と鼻高々と述べ立てたら、何んな者でも『何と云ふ高慢な奴だらう、自分の自慢ばかり爲やがつて……』と思ひ不快と反感を抱かざるを得ませんが、相手から何を問はれても何を稱揚されても、『お蔭で……』とか『私如きが！』と云ふ調子で應答し、『私などはお話する程の事はありません、其より貴下こそ近頃は御成功なすつたさうで……』と云ふ風に謙譲謙遜し努めて相手に花を持たせ嬉しがらせるやうにすれば『謙遜な人だ』『腰の低い人だ』『何處となく奥行のある奥床しい人物だ』『如才ない人物だ』と思はせ、相手に愉快な感應を與へるものであります。二年ばかり前の夏でした、其前二三度私の家へ來たことのある人が突然やつて來て、何か書かして貰ふ物はあるまいか、仕事が無くて困つて居るから、自分に適したものがあつたら遣らせて貰ひたい、何なら書店を紹介して貰つてもよいと云つて來たことがありま

した、其時私は『近頃○○堂から大分御出版なすつたではありませんか。』と言つて見ました。すると其人は『ハイ、大分出しましたが皆能く賣れるので○○堂は大喜びです。』と云ふ、そこで私が『其れでは○○堂に何か遣らせなすつては如何ですか？』と云ふと『○○堂は既う何ですから、書いて持つて行けば必ず引受けて呉れますが……』と負惜みなことを言つて居る。其頃私は種々の著作物を依頼され、到底私一人では依頼者の希望通の時日迄に書き上げることは出來ない事情に在りましたので、最初は何か適當な物を依頼者に交渉の上譲つても可いと思つて居りましたが、其負惜みの言葉を聞くに及んで急に厭氣がさして、同情することが出來なくなりました。結局『それでは君、其方の仕事を遣つたら可いでせう、僕の處にもお譲りしても可いと思ふものがないではないが、○○堂の方が持つて行きさへすれば右から左と引受けて呉れる

なら、何も僕の方の仕事をお譲りする必要はありますまい。』と斷つて仕舞ひました。其人はそれから一時間以上も座り込んで種々辯解らしいことを言つて居りましたが、私は其辯解らしい話を聞いて心を飜す氣には何うしてもなれなかつた。のみならず爾來今日に至るまで其人の慢心と云ふものに對して餘り快い感じを有つて居ない。

其人にして平生心に謙譲謙遜と云ふ萬能膏を確乎と貼つて居たならば、其際は私を訪問した理由を零にするやうな慢心的口吻は恐らく漏さなかつたでせう。『書いて持つて行けば必ず引受けて呉れますが』と云ふ語は平生負惜みではありますが其負惜みは慢心が簇々と頭を擡げて言はしめた言葉であります。隨つて此一語さへ吐かなかつたら、其時私は何等の不快感も抱かず、寧ろ快く其人に同情し其人の利益を圖ることに多少の盡力を爲したのでありますが、惜むべし、慢心は禍して私の同情を失ひ、私の處

へ來た目的を零にし一人の味方を失つたのであります。是れは單に一例に過ぎませんが、斯う云ふ事實は諸君が常に或は經驗し或は見聞して居る所であらうと思ひます。精神的にせよ物質的にせよ他の援助を請はんとする場合は勿論、人を援助する場合でも、無關係の立場に在る場合にせよ、其他如何なる場合にせよ慢心は人の感情を害し己を禍するものでありますが故に、絶對に慎むべきものであります。謙譲謙遜は極端な個人主義から云つたら、自己の權利利益を幾分犧牲にするもので時代後れであると云ふ結論に到達するか知れませんが、謙譲謙遜を時代後れとするやうな極端な個人主義は、結局人間の社會生活を破壞するものでありまして到底今日の社會に容れらるべきものではありません。隨つて、然う云ふ今日の世の中に不適應なものを信ずるのは、自己の社會的生活を否定するものでありますが故に、現代人の以て日常生活に必要なる談話

に應用することは絶對に不適當であります。人間が社會的生活をする上に於ては、徹頭徹尾己れの權利利益のみを主張して他の權利利益を認めないと云ふことは出來ない。己れの權利利益を主張し擁護すると共に人の權利利益も尊重し、擁護してやらなければ、文明的社會生活は出來るものでありません。謙讓謙遜は己の現在の權利利益を擁護しより以上に增進せんが爲めに、人に一歩を先んぜしむる態度を示すものでありまして、即ち自分がより以上の美しい花を咲かせんが爲めに先づ人に花を持たせるのであります。即ち大いに伸びんが爲めに屈するの筆法であり己れの長所を己れ自ら廣告せずして、而も反つて多くの人よりより以上の信認を得、より以上の利益を收むる自家利益擁護增進の手段であります。一本調子に押して行くのでなくて婉曲に當らず觸らず人に快感を與へて人の心を自分に惹付け、人をして積極的に己れに盡さしむる、人情の

弱點に乘ずる社交術の一つであります。

既に述べた通り、謙讓謙遜の德を以て接すれば、相手の人は、必ず『謙遜な人だ』と思ひ『腰の低い人だ』と思ひ『奥床しい人物だ』と思ひ『如才ない人物だ』と感ずるが人情の自然であります。既に是れ丈けの感應を與へれば其反應として來る所のものは好意好情であり、積極的同情であり、より多くの物質的將た精神的利益であります。語を換へて云へば相手の人に是れ丈けの感應を與へることは直ちに大なる利益の基礎であり前提であります。而して其人を自分に忠實なる味方たらしむるものであります。隨つて其偉大なる効顯は相手に感應を與へた時で　感應は効顯の第一現象と見て差支ないのでありまして、神の如しといふは即ち玆にあります。而して其効果は日常の事毎に實際的利益となつて現はれるのであります。

(四) 謙讓謙遜にも程度がある

謙讓謙遜が美德であつて如何なる場合に於ても人の好意好感を買ひ得るものであり、人に好かれる談話術の絶對的必要の條件であることは以上縷述した通りでありますが。然し其れも程度と云ふものがあります。正直も程度を過せば馬鹿の内に這入るが如く、謙讓謙遜も程度を越せば却つて人の不快反感を買ふことゝなるものでありますが故に、程よい度合にすることが肝要であります。

よく世間にある例ですが、何かの會を組織し其會長とか副會長の人選に當り、此人ならば手腕人格兼備の人物であるからと云ふので再三再四懇請しても、『私如き不肖の者が……』一點張りで、散ざ人に世話を燒かせて置いて、其れ程仰有るならばと承諾するものがありますか、是れは一見立派なな謙讓謙遜家のやうであり、嘆稱すべきで

はあつても何等非難すべきものでないやうでありますが、斯う云ふ謙遜は程度を無視した非文明的謙遜であり、或場合に於ては非常に人の不快反感を買ふものでありまして、却つて多くの同情を失することがあります。再三再四固辭して而して起つと云ふ遣り方は一寸見ると豪い謙遜家のやうに思へますが、其れは人に多くの時間と勞力を徒費させるもので極めて不生産的のものであります。何うせ起つた位なら、三度も四度も乃至十度も二十度も人に足を運ばせず、多くの時間を徒費させず、同じ事を繰返させず、せめて二度迄位は謙遜しても三度目には起つ位でなくては謙遜反つて自他を禍いするものであります。

世の謙遜家だと謂はれる人の謙遜は多く度外れの謙遜家でありますが、これは時間的觀念の殆ど皆無であつた時代に生れた儒者に仕込まれた結果でありまして、支那人

日本人の謙遜家の通弊であります。然し今日の世の中は儒教の生れた時代と異つて居ります。其頃は寢て居て福を待ち棚から牡丹餅の落ちて來るのを待つて居て而も優越な生活が出來たかも知れませんが、今日の世の中は愚圖〳〵して居れば忽ち生存競爭の劣敗者となつて悲慘な生涯を送らなければならないせち辛い世の中であります。隨つて一分一秒の微と雖も忽に出來ない世の中であり、儒教の生れた時代に無視され問題とされなかつた時間と云ふものが最も重要視されて居る時代であり、時間的觀念のないものは文明人として文明的生活の出來ない時代であります。故に如何なる場合であるにせよ、己れ一人のみならず人にまで無用の時間を費さると云ふことは、時間の不生産的浪費でありまして、到底文明人の爲すべき文明的謙讓謙遜たる資格あるものと稱することは出來ないのであります。

謙遜度に過ぎれば必ずや相手は『謙遜にも程がある』と思はざることを得ません。『謙遜も好加減にして貰ひたい、我々だつて遊んで居るものではない、無暗に謙遜して人に多く喋舌らせ多くの時間を無爲に費させるなどは迷惑千萬だ』と思はざるを得ません。『結局承諾するものなら好加減にして承諾して呉れたら宜さゝうなものだ、散ざ人に足を運ばせ喋舌らせ時間を費させて置いて承諾するなんて時間的觀念のないこと』と夥しい、一事が萬事此調子で遣られては全く遣り切れない』と思はざるを得ません。『イヤに謙遜ばかりして厭な奴だな』と思はざるを得ないのであります。斯う云ふことを人に思はせ感ぜしめるやうでは折角謙讓謙遜も水泡となり禍なり、寧ろ初めから謙讓謙遜などを爲ない方が宜いのであります。

(五) 文明的謙遜と非文明的謙遜

謙遜は詮ずる所出遮張るな、自慢をするな、先づ人に花を持たせよ、内輪にせよ、八分目にせよ、控目にせよ、一歩譲つて人を進めよと云ふ意に外ならないのでありますが、幾ら内輪にせよ八分目にせよ一歩譲つて人を進めよ先づ人に花を持たせよと云つても、卑下卑屈に陷つて反つて人の輕侮を受けたり、常に人に利用せられたりして所謂馬鹿を見るやうではいけない。己の美點長所を單に人より稱揚せらるゝやうな場合は努めて威張らず得意がらず傲慢ならず、稱められては却つて恐縮ですと云ふ態度を以てしなければならないのでありますが、イザ自己の長所手腕を充分に發揮しなければならないと云ふ實際に當つては、決して躊躇逡巡すべきでない、内輪にする必要もなく控目にする必要もなく、其有する長所なり美點なりの一切を擧げて遺憾なからしむべきでありまして、然う云ふ時になつても内輪にして居るやうでは謙遜の意義

を無にするものとなるのであります。

例へば、前述の如き何かの會長であるとか、其他公私團體の幹部員に推擧せらるゝやうな場合は、不肖到底其器に非ず他に適任者が幾らもある筈と云ふ態度で一應辭退するのが禮であり謙遜でありますが、何うでも斯うでも他が推擧し自分も其處に自分の長所があり自分の適所であり相當の成績を擧げ得る自信があれば、『其れ程までに仰有つて下さるのを固辭するのも却つて禮を失する譯ですから、然らば不肖ながら私としてこの最善を盡して見ませう、然し元來不肖の私畢生の努力を致しましても到底諸君の期待に御滿足を與へることは出來まいと思ひます』と云ふ位に謙遜して起つのが順序であり、適度の謙遜でありますが、扨愈々其任に當つては最大の努力を盡し、徒らに謙讓とか謙遜とかに拘泥せず必ず推擧した人々の期待以上の成績を擧げると云ふ決

心と勇氣とを以て奮進しなければならないのであります。斯くの如くにして始めて最初の謙遜が謙遜として光り耀くのであります。

然し商人などは商賣が商賣でありますから、何處までも腰を低くし謙遜的態度であつた方が適當であり、有効であります。又青年が先輩に對す場合も先輩に對する禮を尊重し、何處までも禮を盡して功を讓り花を持たせると以ふ風にするが結局自己の利益であります。只だ實力を發揮する場合に於てのみ他人の權利利益を侵害しない程度範圍に於て實力を注ぎ最善を盡さなくてはなりません。

要するに、今日の世の中に生活するに必要であり有効である處の謙遜は凡て時間的觀念を有する謙遜であり、自己の時間と勞力とを徒費せず、他人の不快反感を買ふが如き面倒、迷惑、手數を掛けず、世話を燒かせず、徹頭徹尾何人にも快感を與ふる謙

遜であることを要するのでありまして、之れ即ち今日の時代に適應した文明的謙遜であります。隨つて時間の觀念なく程度を考慮せず唯無暗に謙遜すればよいもの丶如く心得て時間を徒費し、人に迷惑を掛け手數を煩はし世話を燒かせて不快反感を買ふが如き謙遜は、少くとも現代人に不適當なる非文明的舊式謙遜であります。

一五　相手の都合を察知すること

（一）　相手の都合を察知すると否との利不利

其れから相手の其時の都合如何を早く察知することが必要であり肝要であります。日本人は一般に時間と云ふもの丶觀念が薄い爲めに、相手の其時の都合如何を察知することにも無頓着なものが多い。人を訪問しても訪問されても、其他如何なる場合に

於ても相手方の都合が何うであるか、卽ち複雜な話をしても差支ないか何うか、何程の時間談話して居ても迷惑にならぬが、多忙であるか閑散であるか、都合の惡いにも拘はらず努めて面會するのではないか、他に急ぎの用事があつて落着いて話して居られないのではないか、其人は何時が最も長時間の談話をするに適當なる時であり何時が一日中一番多忙な時であるか、と云ふやうなことについて注意をするものは極めて尠ない、百人中殆んど九十九人迄は其麼事には一切無頓着であります。隨つて談話術に巧みなものも其れ丈け尠い。

如何に談話時間を經濟的にし、如何に相手に適應せしむることに巧妙であり、其他何が如何程上手であり巧みであつても、相手の都合如何に無頓着であつたら、効力は極めて薄弱なものとなります。何んなものでも都合の宜い時ばかりはない、時と場合

によつては非常に都合の惡いことがある。約束した時は都合のよい筈であつたのが其時になつて見ると都合がよくないことがある。又其れと反對の場合もあつたり、場合によつては話によつて都合が惡いことがあり、差支ないことがある。約束であるからと云つても其約束の時と場合が必ず都合がよいかと云へば然うでないことが頗る多い。又約束してなかつたにしても偶然其時は都合のよいことがある。故に談話に際しては先づ相手の都合如何を第一に察知することが必要であります。談話の內容、時間、場所、其他周圍の事情等から見て相手の都合がよいか惡いか、こんなことを斯麼場合に話して相手が迷惑を感じはしないか、相手は自分と談話をして差支ないか何うか、然う云ふことを第一に察知しなければなりません。

例へば朝八時に出勤する人を訪問して、出勤時間間際までも談話を續けるのは相手

に取つては非常なる迷惑である。縱ひ用件が相手の人の一身上又は其他の利害問題に關するものであつても、出勤時間間際まで悠々と話し込まれては甚だ迷惑である。又食事前などに人を訪問して其人に迷惑はなくとも家人に迷惑を掛けるやうでは、第一家人に嫌はれる、家人に嫌はるれば自然相手のにも嫌はれることになります。或は又非常に忙がしい人で面會を謝絶するのも氣の毒だからと思つて、特に都合して訪問者に面會する場合がある。然う云ふ場合にも悠々と長話しをするのは相手の好意を無にして不快感を招く原因となるものであります。又商人でお客の立て混んで居る際などに複雜な話をするなども相手に取つては迷惑千萬であります。其れと反對に人から訪問された場合でも相手の都合を顧みず時間を費させるは訪問者に迷惑をかけ不快感を惹起せしむる原因となります。然う云ふ風に話の内容と時と場合によつて都合のよ

いこと惡いことがあります。隨つて都合の惡いときに頓着なく話をすれば相手方に不快な感じを起させては談話の効力を零にするものでありますが故に、其結果は精神的に得た物質的に不利損失となつて現はれて來ます。

『何うも彼の男は氣が利かないで困る、あんな場合にあんな話をされて實に困つた』とか『彼奴は感じの鈍い奴だ、此方が外出しようとして居る時に遣つて來て話し込むなんて、人の迷惑といふことに頓着しない、それも何か重要な用でもあれば兎に角、愚にもつかない用件で、實に厭な頓馬だ』とか『あいつは周圍構はず赤面するやうなことを言つて困る』とか『彼奴にばかりは迂乎した事は話せない』などと云ふことは我々が日常耳にする所でありますが、これは相手の都合如何を顧みず談話をする結果であります。

(二)　都合如何を察知するには

其處で相手の都合如何を察知するには何うすればよいか、何を材料として判斷したらよいかと云ふに談話すべき用件と相手の身分職業と其時と場合と相手の樣子によつて判斷する外はないのであります。

二三分間乃至十分間以内で片付かないやうな用件であつたら、而して急を要しないことであつたら成るべく相手の體に時間の餘裕のある時を計つたがよい。時間によつて事務を執つて居る場合に、直接其人の事務上の關係のない事について多くの時間を費させるのは不快感を招く根本であります。例へば官公吏とか會社員と云ふやうな人が勤務時間中に私用について談話するなどは餘程の急用か其他特別の事情がなければ相手に迷惑を感せしめるものであります。又商人などで業務の繁忙な時に悠然と構えて話し込むなどは人に嫌はれる第一であります。商用と云ふのならば兎に角、然ら

ざる用向であつたら先方の忙がしくない時にする、商用でも成るべく時間を切り詰めるやうにすることが肝要であります。然ういふことは總て位地を轉倒して見るが一番早解りであります。自分が先方の人であつて斯う云ふ話をされたら差支があるか、何うか、迷惑に思ふか何うか、不快感を起すか何うかを考へて見れば、相手の人の都合が何うであるかは直ちに判斷することが出來ます。

私なども屢々經驗する所であるが、五分間ばかりでよいから會たいと云ふ人がある。實際忙がしい時は五分間でも三分間でも迷惑であるが、態々來訪されたものを情なく斷るのも氣の毒だと思つて會つて見ると五分間が十分間となり二十分間となり一時間近くも話し込んで此方の迷惑などは頓と氣にして居ないのではないかと思ふことがあります。然うなると其人の用件が何であらうと同情といふものが無くなつて『禮

を知らぬ人』『時間の觀念のない人』と云ふ不快な感じより外殘らなくなる。以前私は然う云ふ場合でも先方の感情を害しないやうに努めて相手になつて居りましたが、それでは肝腎の必要時間よりも無用の時間の方が多くなり、時間の損失丈けでも月に積り年に積つて見ると莫大なるものでありますから、方針を一變して『只今忙がしい事に携はつて居りますから何分間丈けお話を承はることにしませう』と云ふことを會見の劈頭に宣言することにしました、時間は其人と用件とによつて適宜に定めるのであります。處で其れでも宣言時間以上話し込む人が少くないので實に迷惑千萬、摘み出してやりたくなることが屢々あります。

私などにしましても然うですから、一分一秒の時間をも惜んで働かなければならない多忙な人に於ては、相手の都合に無頓着な人との談話には非常の迷惑と不快とを感

ずるであらうとも思ひます。而も相手の都合如何に頓着なく人を訪問する人は其罪己にあることを顧みず多忙の爲め面會を謝絶されると怒る『怪しからん奴だ、態々人が訪問したのに玄關拂ひを食はせるなんて禮を知らぬ奴だ』などと惡態を吐く、そして然う云ふことを吹聽する。勿論世間には何等謝絶すべき理由なくして面倒だとか厭だとか云つて、來訪者に對する思遣り同情もなく遊んで居ても玄關拂ひを喰はせるものがありますが、悉く然う云ふ人々のみであるかと云ふと決して然うではない、實際多忙で一分間でも面會して居る時間がない爲めに氣の毒だとは思ひながら謝絶する場合もあれば、左程必要な用件でもないことに長座されて迷惑した過去の經驗より二度目なり三度目から面會を謝絶する人も少くないのであります。或は又其時の都合によつて何うしても會見して居られない場合もありまして、會ふ時間がありながら手

前勝手の爲めに面會を謝絶するものゝみではないのであります。

（三）要するに氣轉を利かせよ

要するに相手の都合を察知すると云ふことは氣轉を利かせると云ふことになります。『彼奴は氣轉の利かない奴だ』と云ふことは『彼奴は相手の都合を察知することの出來ない奴だ』と云ふことであり『彼奴は頓馬だ』と云ふことであります。氣轉の利く人とか利ない人とに對する人の感情は何うであるかと云ふと、前者に對しては不快な感じを懷くことはないが、後者に對しては何人も不快は感じでも快感を懷くことはない。即ち氣轉の利く人は人に好かれるが氣轉の利かない人は人に好かれないものであります。談話術に於て相手の都合を察知すること即ち氣轉を利かせることの必要は即ち是れが爲めであります。

一六　誠意無ければ人は動かぬ

（一）誠意無きオツチヨコチヨイは駄目

其れから次の要件としては凡て誠意あれと云ふことであります。談話術といふ字義からいへば凡ての場合に於て誠意ある必要はないやうでありますが、誠意に基礎を置かない談話術は如何に巧妙でも人を動かす力は無い。詩にしても文學にしても歌の類にしても作者其人の熱烈なる精神の籠つて居ないものは讀む人を動かす力はない。作者夫れ自身が熱烈なる精神を注入しないもので讀者を感動させやうと云ふのは、己泣かずして人を泣かしめんとするに等しきものであり、汽車に燃料を用ひずして動かさんとするに等しきものであり、己言はず語らずして人に己の思惟する所を知らしめん

とするに等しきものでありまして、如何なる人でも決して動くものではありません。

談話に於ても其通りで、己に誠意なくして人を動かさんとするは無理な註文であり出來ない相談であります。オツチヨコチヨイ的に話し後は野となれ主義に談じ、チャラツポコを言つても而も猶誠意ある談話と同樣の効力あらしめんとするは種を蒔かずして收穫あらしめんとするに等しく非常識的註文であります。假りに相手方が誠意なき談話をするとしたら諸君は果して其れに動かされるか何うか、恐らく何人と雖も『何を好、加減な事を言つて居るのだ』とは思つても其れに感じ動かされることはないでせう。積極的談話即ち相手の人を動かさんとする話に於ても、將た消極的談話即ち相手が動かさんとするに對す應對的談話の際に於ても、誠意を以てすることは必ず條件としなければならない。積極的の場合は人を動かさんとするのであるから誠意あるを必

要としても消極的の場合は反對の位地にあるものだから其必要あるまいと思ふ人があるか知れぬが、消極的の場合でも必要に於て相違ばない。假りに諸君が或人を動かさんとして何事かを話すとして、相手が毫しも誠意を以て對して呉れなかつたら何うである。諸君は果して其れでも不快不滿を感ずることはないか。恐らく不平であり不快感を起さずには居られないでせう。相手が消極的即ち受身であり諸君が積極的即ち動かさんとする立場の場合であつて諸君が然う思ひ感ずるとすれば、之れが反對である場に於ても諸君と同樣に相手が不平不滿であり不快に感ずるに相違ないことは自然の理でありませう。即ち共通的に不快を感じ不平不滿を抱くものであつたら、何れが何うである場合でも同じであります。

(二)　斯うすれば自然に誠意あり

其處で如何なる場合にも誠意を以てすると云ふことは何うすれば出來るかと云ふにこれは一寸困難なやうで極容易いことであります。其の容易なることに於ては相手に適應せしむることよりも、氣轉を利かせることよりも、快感を以て談話を終始せしむることよりも容易であります。卽ち相手が自分であつた場合はと云ふことを思ひ、相手の立場に同情を有てばよいのであります。例へば金融について相談を受ける場合にすれば、自分が人に金融を相談する場合、相手の人が些しも誠意を以て對して吳れなかつたら何んな氣持がするかと云ふことを考へて見、同じ應ずるにしても將た斷るにしても誠意を以て應ずるのと否と誠意を以て遺憾ながら斷ると云ふのとは相手の心に何れ丈けの感應を與へるかを考へて見れば、直ちに相手の立場に同情し相手の胸中に好意を表することが出來るのであります。

我々が如何なる相談を持ち込むにしても相手が毫しも誠意を以て對して吳れない場合は非常に不平不滿であり不快感を惹起するものでありますが、是れは詰り相手の人が此方の立場を理解せず同情を有つて吳れないからであります。如何なる人であつても相手の立場を理解し同情を表して吳れゝば、假令其結果が不結果であつたにしても決して不快反感を懷くことはないものであります。お氣の毒であるが貴下の要求に應ずることが出來ないと云つて拒絕する場合でも、誠意を以て此方の立場が何うであらうと其麼ことには一切頓着せず拒絕される場合とは非常に感じが違ふ。兎に角此方の立場を理解して吳れた上での斷りであるから何か已むを得ない理由が在るのだらうと飽く迄も善意に解釋する善意に解釋する、場合は誰でも決して不快感を持つものでない、快感は持たないにしても不快な感じは懷かないものであります。然るに相手の立

場を理解せず同情を持たず不誠意な斷り方をされては、假令何う云ふ問題であるにせよ餘り好い氣持のするものはない。必ずしも借金申し込みの場合のみでない。必ずしま頭を下げて何等かの助力を懇請する時のみでない。心ずしも自他の問題について辯明又は謝罪的話をする時のみでない。如何なる問題如何なる用件について談話する場合に於ても相手が無誠意を以て對する程癪に觸るものはありません。侮辱に對しては何人も憤怒の情を禁じ得ないと同樣、無誠意に對しては何人も不快感を起さずには居られないものであります。人に好かれる談話術の一要件としてすべて如何なる場合の如何なる用件について如何なる人と談話するのでも必ず誠意を以てせよと云ふのは卽ち是れが爲めであります。

一七　嘘は吐くな法螺と喇叭は吹き方一つ

(一)　覿面に來る嘘の報酬

何人にも好かれる談話術の奥義に達せんとするには、以上縷說したのみでは完全ではありません。今一つ嘘を吐かぬことと法螺は吹く必要があつたら法螺らしく吹くと云ふことであります。

元來嘘ほど人を馬鹿にしたものはなく、吐かれた方でも是れ程癪に觸るものはない。大きな嘘にせよ小さい嘘にせよ、吐いて氣持の宜いものでなく吐かれて嬉しくなく有難ないものはない。嘘にも區別をしたら外交官の吐く國際的嘘があり政治家の吐く政治的嘘であり、宗教家實業家などの吐く社會的嘘があり、其他私交上に吐く各個人の個人的嘘があり、之れを又內譯したら隨分種類も多くなるに違ひありませんが、縱ひ如何なる種類の如何なる嘘にせよ嘘は一の罪惡たるを免れないものでありま

す。

嘘は相手を事實と信ぜしむることに於て効力があり、嘘としての價値は相手を信ぜしむる時間の長短に正比例するものでありますが、是は嘘と云ふものに對する道德的批判を別問題としたる場合のことであつて、嘘の必要的價値ではないのであります。卽ち道德的批判を別問題としたる泥棒と云ふものゝ巧拙的價値が露顯時間の長短に正比例するのと同じであります。然し泥棒は法律上から云つても道德上から云つても重大なる罪惡で絕對に不問に附することの出來ない惡事で、泥棒行爲の無罪的承認をするものは世に一人もない。嘘は他人の生命財產に直接損害を與へない限り法律上の犯罪行爲とはなりませんが、道德上有罪であることは他人の生命財產に禍を及ぼすことの直接たると間接たると得た又全然無波及であるとを問はないのであります。卽ち

嘘は如何なる場合に於ける如何なる嘘にせよ道德上の罪惡であります。

隨つて嘘に對する報酬も道德的に來るものでありますが、其報酬は單に精神的に來るのみでなく、物質的方面に於ても覿面に來るものであります。『彼奴は嘘吐きだ』と思はれ言はれるやうになつたら、最早信用は零であります。嘘を吐くことが多ければ其れ丈け信用は少くなり、果ては全然信用といふものが無くなつて仕舞ふものであります。而して信用と云ふ精神的損失ばかりでなく、信用が減じ或は全然無くなつた爲めに生ずる物質上の損失は亦莫大なるものであります。而して其精神的及物質的損失は覿面に來るもので、絕對に待て暫しのないものであります。

談話の際に嘘を吐けば、而して其嘘が現場に於て判明すれば、其場に於て信用が零となり、一時間後に露顯すれば一時間後に信用が無くなり、翌日に露顯すれば翌日に

信用が無くなり、一週間一ケ月後に露顯すれば一週間一ケ月後に信用が零となる。或は嘘の程度と種類によつて其れに比例して信用が無くなる。多年嘘を吐かないことで信用を得て居たものでも一度嘘を吐くと『矢張り嘘を吐くあの調子では是れ迄も屢々嘘を吐いて居たのかも知れない』と思はれる、次に『迂濶信用は出來ない』と思はれる、一度相手に斯ふ思はれたら其印象を消すことは容易でない、殆ど絶對に駄目と云つても過言ではない。

勿論嘘にもよります。相手の或は其他の人の生命財産に危險を發生せしむるが如き罪の深い嘘となつたら一度で人の信用を墜して仕舞ふが、輕い一寸した嘘ならば然うでもない、或程度までの信用は繫げる、と云つても矢張輕い嘘が屢々度重なれば信用を零にすることは同じであります。嘘も方便だと云つて能く嘘を平氣で吐く人があ

ります。否、然う人の方が世の中は九分九厘を占めて居る、人の言ふことは迂濶信用の出來ないと云ふは是れが爲めであります。是れ位の嘘は誰でも吐くことだからと云つて嘘を吐く、それが自分の信用を墮して居る原因だとは些しも氣がついて居ない、輕い一寸した嘘でも自分の信用を削る鉋だとは氣がつかずに居る。それが世間一般であります。隨つて世間一般の人々が誰にでも一樣に好かれないのは此の嘘を吐くことが重大なる原因の一となつて居ります。

而して嘘を吐いた報酬は單に精神上の損失卽ち信用の失墜と云ふのみでなく、物質上にも多大の損失となつて顯はれて來ます。一々詳細に述べる迄もなく一寸した嘘を吐いたが爲めに信用を無くし、金融の相談が零になつたり、無擔保でなかつたものが擔保無しでは不可と云ふことになつたり、保證人を要するやうな破目になつたり、或

は信用取引をして居たものが現金取引でなくては應じないと云ふことになつたり、取引を拒絶されたり、其他取引上に多大の不便不利を及ぼすことなどは世間に幾多の實例があります。或は又顧客が減じたり、收益が少くなつたり、反つて損失を招いたり其他いろ〳〵の事實が世の中の生きた事實によつて示されて居ります。之れに反して嘘を吐かないが爲めに加はる信用と物質的利益が何うであるかは嘘を吐く爲めに生ずる損失の莫大なるによつて細說する迄もなく莫大なるものであることが了解されませう。

(二)　法螺と喇叭は吹方一つで利となり不利となる

次は法螺でありますが、是れも嘘の一種でありまして、人の信用を薄くし或は全然零にすることに於ては嘘と毫しも相違する所はありません。然し法螺は喇叭と同じく

吹き方によつては大いに役に立つことがあります。喇叭を下手に吹かれては只だ喧騒で煩さいばかり何の感動も與ふるものではありませんが、特殊な場合に上手に吹かれると人に無量の感激を與ふるものであります。例へば軍隊の行進其他種々の運動を行ふ場合とか、或は弔祭の式場に於ける弔祭の曲を奏するとか、或は群集に對して或命令號令通告を爲す場合に喇叭を用ひるとか云ふやうな場合は、或は壯嚴の或は爽快の、或は暗然たる、或は嚴肅なる、或は緊張的感激を與へ氣分を漂はせるものであります。法螺も之れと同樣で吹き方によつては大いに人に好かれるものであります。

『彼奴は法螺吹きだが彼奴の法螺は實に面白い法螺で厭な處がない、彼奴の法螺を聽いてると何うしても釣り込まれて笑はされて仕舞ふ』とか『彼の人は法螺を吹くが罪が無くてよい』などと云ふことは能く耳にする所でありますが、然う云ふ法螺は多

くの人に好かれ愛せらるゝ法螺で社交上相當の價値ある法螺であります。

其處で法螺は何う云ふ吹き方をすれば役に立つか人に好かれる法螺となるかと云ふと、極めて罪のない無邪氣な吹き方をするに在ります。豪ぶつた法螺を吹いたり、人を馬鹿にしたやうな法螺を吹いたり、人を卑下したやうな法螺を吹いたり、人の感情を害し不快反感を招くやうな法螺を吹いたりするのは宜しくない。輕い罪のない無邪氣な法螺を吹いて相手を笑はせるやうにすればよいのであります。人の笑ふにも苦笑ひなどもあるから笑ひが總て快感によつて來るものとは斷ぜられませんが、無邪氣な法螺を聞いて笑ふ笑は決して不快感に基いたものではありません。

語を換へて云へば滑稽的法螺を吹くに在ります。利己的野心より爲めにせんとして吹かず唯無邪氣に人の頤を解かせるやうな吹き方をすれば、法螺に厭味がなく氣障がなく罪がなく邪氣がなく利害打算的の所なく、極めて輕いフワ〳〵したものとなり、聞く人に何等の壓力をも加へないのであります。隨つて、滑稽談を聞いて不快感を起すものゝないと同樣、何等不快の感じも起らない。而して其無邪氣な滑稽的法螺は滑稽の引力と同樣の一種の魅力を以て聞く人を引つける力あるものでありますが故に、結局人に快感好情を以て迎へられると云ふことになるのであります。

(三) 原則としては法螺を吹かぬがよい

然し法螺と云ふものは原則としては吹かない方が可い。何故かと云ふと、縱ひ輕い罪のない無邪氣な法螺でも吹く程度によつて品格の相場を下落せしめ、人に輕んぜらるゝものであるからであります。

而して法螺と云ふものは口で喋舌るものであるから、年に何回とか一日に何回とか

一談話毎に何回と規定さるべきものでなく、其一回の分量も藥や何かのやうに何程と定量を定める譯には行かない、隨つて一日にこれ丈けの分量を吹けば人に好かれると定つて居るものでなく、これ以上吹けば人に嫌忌されると決定して居るものでもなく、これからこれ丈けが無邪氣な法螺で是れから是れ丈けが罪になる法螺であると云ふ譯にも行かない。又人により場合によつて無邪氣な法螺も有邪氣な法螺と誤解され易く、輕い法螺のつもりで吹いたものが案外重い法螺に思はれることが少くないものであります。殊に無邪氣な法螺でも屢々吹いて居ると品位と云ふものがなくなる、オツチヨコチヨイ的人物の如く見られるやうになるものでありますが故に、何れにしても法螺は絶對に吹かない方が安全であります。

一八　懸引は談話の種類によつて必要不必要

(一)　懸引は談話上の戰術

談話には多くの場合懸引と云ふものがありますが、是れは戰爭に於ける戰術と同樣有利に自己の目的を達せんが爲めの手段であります。例へば直接關係のないやうな談話を主にしながら、チヨイ〳〵仄めかして見て相手の意中を測つて見たり、或は間接的事柄に釣り込んで置いて相手が油斷して居る際に乘じて急擊を試みて奇勝を博したり、或は意無きものゝ如く思はせて置いて際どい所で背負投げを喰はせたり、相手の不明に乘じて五のものを八と云ひ十と云ひ、百のものを千と云ひ二千と云ひ、六七乃至五百千と云ふ有利な處で約束して大利を得たり、意なしと斷言して置いて相手を油

斷させ裏から人を廻して奇利を得ると云ふやうに、虛に對して實を以てするが如く見せ實に對して實を以てするが如く見せて相手の虛を衝き、虛に對して虛を以てするが如く思はせて置いて實を以てすると云ふ風に、戰術的技巧を弄するのであります。隨つて此懸引あるが爲めに失敗を變じて成功たらしむることがあり、折角の勝利を失敗に歸せしめ水泡に終らしむることもあります。勞を少くして功を大にし、弱卒を以て勇將を屠ることもありまして、戰爭の如き特殊のものゝみでなく日常の談話に於ても大いに必要であります。

（二）懸引を禁物とする場合

然しながら其必要は談話の內容となる用件問題の種類に依るものでありまして、種類によつては必要でないのみでなく、却つて大なる禍となるものであります。例へば

自個の不幸な境遇を訴へて一人又は數人の救助援助を求めると云ふ場合や、或は他人の境遇に同情して第三者として相手方に求援を交涉するやうな場合や、其他相手方の同情を求めると云ふやうな場合に懸引をするのは、却つて同情を失ひ反感を招くやうな結果となります。其場で懸引だと看破されるやうな下手な懸引は勿論のことであるが、事後に於て懸引であつたことが露顯すれば、事件問題の大小性質の如何によつては多くの信用を一朝にして失墜することになります。第三者であつた場合などは自分の信用を墜すのみでなく、本人の信用迄も害するやうなことになるのであります。又其れと全然反對の立場に立つた場合でも人の弱點に乘じて懸引を弄し、相手方に不利益を與ふるが如き結果を作爲するのは同じく信用を無にする原因となります。

人事に關する事のみでなく商取引などに於ても懸引を必要とする場合と絕對に禁物

とする場合とがあります。尤も商取引は大體に於て懸引を絶對に爲ないことにしては利益を收得することが出來ない性質のものであるから一概に全然懸引は不可と云ふ譯ではありませんが、人の弱點に乘じて惡辣なる懸引をするのは宜しくない。物價の一般的不足と云ふ社會的弱點に乘じて買占を爲し暴利を貪るが如きは、社會を無視した惡辣なる遣り方で、單に周圍の人々より信用を撤回せらるゝのみでなく、社會的信用を零にして仕舞ふものであります。或は又是れが個人對個人である場合も同樣で人の弱點窮所に乘じて相手を猶以上の窮地に陷れたり不當の利益を收得したりするのは、相手の怨恨を買ふのみでなく、社會の指彈排斥を受けるものであります。

(三)　懸引を必要とする場合

然らば懸引を必要とする場合は何う云ふ場合でであるかと云ふに、双方が利益問題

について意見が一致しないと云ふやうな場合などでありまして、商人に例へて云へば甲が乙に自家の商品を賣込まんとする場合甲は一個につき二十錢宛の利益を得んとして一個一圓二十錢を主張し、乙は自己の利益を一個につき十錢を多くせんが爲めに一個一圓十錢を主張するが如き場合でありまして、此場合に於ては賣方たる甲も買方たる乙も交渉に懸引を必要とするのであります。而して甲の懸引が乙の懸引に優つた場合は甲の主張通り一圓二十錢の單價を支持することが出來、乙の懸引が甲の懸引に優つた場合は甲は乙の要求に讓歩しなければならないことになり、懸引の巧拙優劣によつて勝敗が決せらるゝのであります。すべて商業上の取引は利益と云ふものを目的として取引をするのでありますが故に、而してより、より安價に買つてより、より割よく賣ると云ふのが商取引の一般原則でありますが故に、商取引に於てはすべて懸引を必要とすると云

つてよいのであります。只だ惡辣なる懸引は相手方の惡感を買ふのみでなく社會の反感指彈を煽るものでありますから、懸引を必要とする商取引に於ても惡辣なる懸引は絶對に慎まなければならないのであります。

又國際上の交渉談判なども一本調子で行けない場合が少くありません。或特殊な事件問題を除き他は悉く相當の懸引を必要とします。すべて國際上の問題は、自國の權利利益の擁護伸長と云ふことを基礎とするものであつて、一般商取引と同じやうなものでありますから、ブッキラボーの遣り方では相手國に利用せられ或は却つて不利を招く事があります。併し外交上に於ける懸引も一般個人間の商取引と同樣、相手國の弱點に乘じて惡辣なる懸引を爲す如きは、却つて失敗の固となるもので、相手國の國狀、其交渉談判すべき事件問題の性質等を考慮して適當の懸引を爲すべきであります。

す。

（四）談話の主題の性質と相手次第

要するに談話術としての懸引は或場合に於ては大いに必要であり、或場合に於ては絶對に禁物であると云ふ風で、一定的に必要不必要を云ふ譯には行かないものでありますが故に、懸引が必要であるか否かは、其談話の主題となるべきものゝ性質と相手によつて判斷する外はないのであります。性質は懸引を要する性質のものであつても相手によつては懸引を禁物とする場合があり、懸引を禁物とすべき性質のものでも相手次第では多少の懸引を必要とすることがあります。相手が平生懸引を爲さない人で懸引を嫌ふ人に向つて懸引をすれば『彼奴はイヤに懸引ばかり云ふ奴だ』とか『彼奴の話は迂濶信用が出來ない』とか『彼の人の話は必ず何割か割引して聞かないと危險

である』などと一括されて、偶たま懸引をしない話をしても矢張割引して聞かれると云ふことになります。其事件なり問題なりが割引して聞かれても差引ないものであつた場合はよいが一分一厘の割引も容さない、縦ひ少しでも割引して聞かれては多大の不利損失を來す云ふやうな事を割引して聞かれては非常の不利益となり多大の損失を蒙らなければならないことになるのであります。

又其れと反對の場合即ち相手が大いに懸引をする人であつて談話の主題となるべき事件問題が大いに懸引を必要とする場合に懸引をしなければ、結局相手の懸引に乘せられて不利な立場に陷らなければならない。又主題の性質は懸引を禁物とするものであつても相手が懸引をして話をする人であつたら、而して此方が相手が懸引する人だと云ふことを知らず、單に事件の性質が懸引を禁物とするものであるからと云ふのみ

で懸引をしなければ、是れ又相手の懸引に乘せられて折角の交渉も談判も此方の不利となり、談話の目的を達することが出來ないと云ふことになります。

故に、談話に於て懸引すべきか否かは、其主題となるべきものゝ性質が懸引を必要とするものであるか禁物とするものであるか、並に相手の人が懸引する人であるか否かを考へて然る後何れかに決すべきものであります。隨つて談話術としての懸引は主題の性質と相手次第によつて或は必要とし或は禁物とすると云ふ外はないのであります。

人に好かれる談話術（完）

馬六著
時代の不信感があつた。

談話術

定價金壹圓

大正八年五月五日印刷
大正八年五月十日發行

著者　樋口麗陽

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地　宮下軍平

印刷者　東京市京橋區新榮町五丁目七番地　村田豐吉

印刷所　大倉印刷所

發行所　東京市神田區錦町一の十六　振替東京第三四〇九番　二松堂書店　電話神田二四七八番

不許複製

二松堂書店發行

戸籍調べ叢書

醍醐惠端先生著

佛様の戸籍調べ　既成好評如湧第廿版

神様の戸籍調べ　日本之部既成好評如湧第十版

神様の戸籍調べ　外國の部既成第五版

赤穂義士の戸籍調べ　近刊

侠客の戸籍調べ　近刊

美人の戸籍調べ　近刊

内外偉人の戸籍調べ　近刊

各冊四六判上製無類美本

各冊定價壹圓廿錢送料各八錢

二松堂書店發行

大町桂月先生校訂

大正 式辭と演說

（好評如湧忽十八版）

四六判四百八十頁上製頗美本全一册
定價金一圓五拾錢小包送料十二錢

人と人と相對する場合に物が言へても公衆に對しグウの音も出ざる物多し、是れ平素修養の足らざるが故なり。本書は各種の會合に臨みて必要なる式辭、演說、答辭等無量五百餘種を網羅したれば一讀如何なる場合に臨みても立所に應用自在ならしむる斯界唯一の權威ある良書也。

尾崎行雄先生校訂

最新雄辯術

四六判上製美本全一册
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

X 387
13

X

終